全国私学教育研究集会京都大会詳報

世界を見つめ、未来に挑戦

~私学の先進的精神は時代を超えて~を研究目標に

全国から380名の教員等が参加

一般財団法人日本私学教育研究所（吉田晋理事長、平方邦行所長）は、令和3年10月21・22の2日間、京都市の国立京都国際会館、ザ・プリンス京都宝ヶ池、リーガロイヤルホテル京都の3会場で「令和3年度全国私立中学高等学校全国私学教育研究集会京都大会」を開催し、全国から380名の先生方が参加した。

「世界を見つめ、未来に挑戦~私学の先進的精神は時代を超えて~」を研究目標に、教育政策を巡る最新情勢報告や記念講演「京の文化」、京都府私立学校の活動紹介、私学経営・教育課程・生徒指導・特色教育・グローバル教育の5部会での講演や実践発表、パネル・ディスカッション等を通じて、建学の精神を継承・発展させながら先進的な私学教育の在り方等を探究した。

後援は京都府・京都市、日本私立中学高等学校連合会。近畿地区私立中学高等学校連合会・京都府私立中学高等学校連合会が実施を担当した。

大会初日は、京都市岩倉の国立京都国際会館を会場に午後1時から開会式、全体集会が行われた。

開会式は、佐々井宏平・副実行委員長（京都府私立中学高等学校連合会長）の開会のことばの後、主催者を代表して吉田晋・日本私学教育研究所理事長があいさつに立ち、京都私学等の関係者の尽力で無事、研究集会の開催に漕ぎつけたこと、開会式に西脇隆俊・京都府知事と門川大作・京都市長が揃って出席されたことに感謝し、参加した教員等には今回の研修を皆さんの力にしてほしいと話した。

また摺河祐彦・実行委員長（近畿地区私立中学高等学校連合会長）が歓迎のあいさつを行い、参加者にとって有意義な研修になるよう全力で運営していくと話した。

兒島裕之
辻本賢
那須文英
鹿野

国立京都国際会館で行われた開会式

その後、来賓の西脇知事は、平成9年以来24年ぶりに私学の発祥の地・京都で開催されたことに感謝した上で、今回の研修が将来を担う人材の育成につながっていくことに強い期待感を表明し、また大会の全体会で西脇知事の母校である洛星中学高等学校のオーケストラ部による演奏や京都光華中学高等学校の生徒による和歌披講が行われること、令和4年度に文化庁が京都に本格移転してくることなどに触れ、研究集会参加者に文化芸術活動にも意を用いてほしいと話した。

続いて門川市長は私立学校が京都の教育を支え、学力面でも全体を引き上げていることなどを報告し、私立学校への大きな期待感を表明した。

その後、令和4年度全国私学教育研究集会開催地区の下屋浩実・日本私立中学高等学校連合会中部支部長が令和4年度全国私学教育研究集会岐阜大会は10月20・21の2日間、岐阜市の長良川国際会議場等で開催すること、記念講演は梶田隆章・東京大学宇宙線研究所長（ノーベル物理学賞受賞者）に「神岡でのニュートリノ研究を通して考える理科教育」を演題に講演をしてもらう予定であることなどを報告し、準備を進め多くの参加者を迎えたいと話した。

最後に北村聡・運営総括委員長の閉式の辞で開会式が終了した。

その後、洛星中学高等学校オーケストラ部による京都府私立学校活動紹介「オーケストラ演奏」、「教育政策と私学情勢について」をテーマに吉田晋・日本私立中学高等学校連合会長が教育改革や文部科学省等の予算獲得を巡る活動状況を報告、続けて平方所長が21世紀型の教育の実現を目指して同研究所として私学経営研修会や各種の私立学校専門研修会、教員の経験段階に応じた研修等の機会を提供していることや、教師の変化・成長が成功の鍵であることなどを話した。

記念講演は、冷泉貴実子・公益財団法人冷泉家時雨亭文庫常務理事が「京の文化」と題して講演した。旧暦について、紀貫之など著名な和歌に詠まれた季節や花などについて解説した。講演の中では作歌指導・監修をしている京都光華中学高等学校の生徒による和歌披講が古式ゆかしく行われた。

研究集会2日目は、5部会に分かれて終日、講演や実践発表、パネル・ディスカッション等を通じて、世界を見つめ、未来に挑戦する私立学校を考えた。

このうち私学経営部会には125人の理事長や校長等、主に私立中学高等学校の管理職の先生方が参加、「激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは」を研究目標に、ウスビ・サコ・京都精華大学長による基調講演、資金運用の面から京都の私学を長年支えてきた藤林昭一・公益財団法人京都私学振興会理事長による実践報告、午後からは4人の学校法人理事長によるパネル・ディスカッションが行われた。

ウスビ・サコ学長は日本初のアフリカ系（マリ共和国出身）学長として、日本の教育について、マリ（フランス式教育）では好奇心をどんどん出し、質問するのに対して、日本では小学校低学年では好奇心が強いものの、高学年になると好奇心を抑え込み、周囲からどう見られ、期待されているかを考えてしまうことを指摘した。自分のボイス、メッセージを持つこと、一人一人が自覚を持ち、あの人がこう言うかもしれないと自分の可能性を抑え込まないことの大切さなどを力説した。

藤林理事長は、資金の運用益で私学関係団体助成金交付事業、顕彰奨学金事業、教育機器の寄贈、広報事業、教職員の福利厚生事業、京都私学会館の運営を実施していることを報告。こうした事業実施のための資金運用については、安全性（危ない投資話には手を出さない）、収益性（期待利回りが得られること）、分散投資、リスク管理（ローリスク・ハイリターンが理想）、信用（信用第一、情報開示が大切）が大切なポイントだと強調した。

真のグローバル化を目指して！
~日本の子どもたちに伝えたいこと~

2日目にザ・プリンス京都宝ケ池で行われた私学経営部会

私学経営部会の日程で最後のプログラムとしてパネル・ディスカッションが行われた。テーマは「激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは」で、パネリストは嵯峨実允・学校法人藤華学院理事長（東京都）、梅村光久・学校法人三重高等学校理事長（三重県）、原田賢幸・学校法人原田学園理事長（鹿児島県）、コーディネーターは摺河祐彦・姫路女学院中学高等学校理事長・高校長が務めた。国際教育、ICT活用、働き方改革、学校法人のガバナンス改革等について意見を交換した（詳細は3面参照）。

私学経営部会の閉会式では、長塚篤夫・私学経営専門委員長があいさつし、「今回の研究目標の『撓まぬ』は最近の言葉で言えばレジリエンスだ。新型コロナのような課題からどのように回復していくのか、私たちが一番考えなくてはいけない課題は人口減少だろう。しかし世界の人口は増えている。世界を見つめ、グローバルな視点で考えると教育の必要性がますます高まっている。世界を見ればわれわれ教育に携わる者のやるべきことはたくさんある。未来に挑戦する私学の在り方を研修会を通じて今後もますます深めていきたい。また令和4年度の全国私学教育研究集会岐阜大会では、今回当部会と合同で開催した法人管理事務運営部会を別部会として開催し、同部会に二つの分科会を設ける。そのうちの一つの部活動運営分科会で働き方改革と私立学校の特色の一つである部活動をどう成り立たせていくのか議論していきたいと考えている」と話し、私学経営部会を締め括った。